



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

## 巻頭言

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 細見 和志   |
| 雑誌名 | 総合政策研究  |
| 号   | 50  |
| 発行年 | 2015-07-31  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/10236/13445">http://hdl.handle.net/10236/13445</a> |

# 巻頭言

細見 和志  
総合政策学部長

「総合政策研究」第50号、学部創設20周年記念号をお届けします。

関西学院大学総合政策学部は、あの阪神淡路大震災の起こった1995年、神戸三田キャンパスに関西学院大学の8番目の学部として創設されました。創設時、学科は総合政策学科だけで、その中に、環境、都市、国際発展という3つのコースがありました。

この学部の研究紀要である「総合政策研究」が50号を迎えるにあたって、いささか回顧的な視点から感想を述べます。私は、学部開設の翌年、1996年に教員として仕事を始めたのですが、正直なところ、「総合政策」とは何か、全く分かっていませんでした。実際、全国でもまだ数校しか存在しない学部ですから当然ですが、総合政策学部で教育を受け、研究をして来たという教員は一人もいません。全員が、既存の学問分野の専門教育を受けて教員になったものばかりでした。経済学部や法学部、理学部や工学部、文学部や社会学部というように、出身学部は多彩なのですが、だれひとり総合政策学部の出身者はいないのです。ですから、学部の理念や教育研究について、具体的にイメージでき、それを模範的な形で実践できる教員は数少なかったと思います。ほとんどの教員が、それぞれの仕方で、総合政策とは何かを模索し、試行し、あたかも暗闇の中をわずかな光を頼りに進むような状態で、教育研究を続けていました。

手探りで道を進んだのは、教員だけではなく、学生も同様でした。いや学生の方が教員以上に、自分の属する学部のアイデンティティを真剣に求めていたのかもしれない。創設当時、よく学生たちと「総合政策とは何か？」という問題について話し合いました。今では恒例になった学生による研究発表会「リサーチ・フェア」では、毎年のように、「総合政策とは何か」をテーマにした発表があったと記憶しています。例えば、「経済学部」の学生が、「経済学とは何か」と教員に問いかけてくれば、問いを投げかけられた教員の方が、答えに窮するという場面を想像することはまずできないでしょう。人によって答えの内容に違いはあるとしても、経済学部で教えている教員であれば、これまでの学問的な裏付けを伴った答えを用意できるはずですが、しかし、総合政策学部の場合は、それとはまったく違っていました。「総合政策学部とは何か？」という問いに対して、教員である私は、「正解を答える」という形ではなく、問いを発した学生と一緒に考える、という仕方でしか応じることができなかったのです。

もちろん、学部のパンフレットには、学部の理念や教育研究の内容について詳しい説明が掲載されています。それを読んで、学生の問いに答えることはそれほど難しいことではありません。当然ですが、受験生対象の学部説明会などでは、通り一遍の決まり文句で、学部の説明をして難を逃れていました。しかし、そこでの説明は、私自身の言葉、私自身の身体から発せられたものではなく、他の誰かの言葉を少し加工しただけのものでしかありませんでした。

あれから20年がたち、総合政策学部も総合政策学科、メディア情報学科、都市政策学科、国際政策学科という4つの学科を擁する学部へと発展しました。学生と教員の数も倍になり、創設時から比喩にならないほどの大所帯に成長したのです。学科を4つに分けたことは、総合政策学部の特色を学外に発信する上で大きな効果がありました。総合政策学部 総合政策学科だけでは、一見ただけで学部の教育研究の中身が全く見えないのです。4つの学科は、それぞれ、政策課題の領域を示しています。既存の学部のように、学問分野で学科を分けるのではなく、政策課題によって分けることで、総合政策学部の特色を今までより明確に示すことができたと思います。また、学部の研究紀要「総合政策研究」もこの号で50号になり、ここに掲載された数々の諸論文は、この20年の間に様々な研究者が積み重ねてきた「総合政策」的研究の成果です。

創設時には数少なかった「総合政策学部」ですが、今では、多くの大学に「政策系」学部が存在しています。「政策系」学部は、今日では、すでにある一定の知名度と評価を得たと言ってもいいでしょう。「政策系」学部といっても、関西学院大学総合政策学部のように、幅広い学問分野の教員をそろえ、教養教育的な側面を強く前面に出して、学際的な政策研究あるいは教育を行う学部もあれば、どちらかというと、法学部・経済学部の教員を中心にそろえて、より限られた教育目標を掲げて教育を行う学部まで様々な形があります。いずれにせよ、いまや総合政策学部は、創設当初のように、教員が「総合政策とは何か？」という根本的な問いをめぐって、毎日、右往左往するようなみっともない事態はなくなったかに見えます。実際、総合政策学部の卒業生が、すでに学部で教鞭を取るような時代になっています。

しかし、20年という時間が経過した今だからこそ、改めて「総合政策とは何か？」という問いに、自分の言葉で、自分の身体から出てくる言葉で、答えてみる必要があるのではないのでしょうか。学部の社会的認知度も上がり、4つの学科で足元を固めたとはいえ、それに安心して、創設当時のことを忘れてはなりません。世阿弥の言葉に「初心忘れるべからず」という有名な言葉がありますが、これは、「物事を始めた時の新鮮な気持ちを思い出せ」という意味ではなく、「初心者のころの稚拙さや不安を思い出して、注意を怠るな」という意味だそうです。もちろんその答えがひとつである必要はなく、それぞれの専門分野に応じた多様な答えがあるはずです。これからは、20歳の大人になった総合政策学部の一員として、改めて「総合政策とは何か？」という問いに向き合ってみようと思っています。